
リベンジ！

重装改

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リベンジ！

【Nコード】

N7094Z

【作者名】

重装改

【あらすじ】

四年前、十九年間育ててきてくれた恩師を目の前で殺された青年と、その死の原因となってしまった 魔機 の操者。

四年ぶりに思わぬ形で再会した彼らは……

天地物語の息抜きで書いているので、非常に不定期です。

ご了承ください。

四年前

バルグ国の不落壁　　例えば、

『早朝に周りを走り始めたら一周する頃には次の日の出を迎える』

『城が見えなくなるほど巨大で日差しも侵入を諦めた』

『生えようとした雑草が見張り番に睨まれただけでみるみる萎れた』

『見張り番がグツと握りこぶしを作っただけで、賊の自走砲が吹き飛んだ』

『心なしか、見張り番の方が国王よりも偉そうだ』

など、酒場の笑い話やお国自慢には欠かせない。

今、その壁の外に広がる広大な景色が戦火によって薙ぎ払われ、そして焼き尽くされていた。

戦場に立っている者は大きく分けて二種類だ。

一つは、大きい物は三機積みば城壁の壁に届く程の甲冑然とした巨大な機体。

魔力を込めた魔石を媒介に動く、通称……　魔機。

そしてもう一つは、連なる黄色の単眼、黒光りする表皮、ヨダレが滴る牙、一目見て外敵とわかる、非常に醜悪な怪物。

空の裂け目から降りてくるその様子から、　異界獣　と呼ばれている。

これら以外は乱戦の煽りを受けて全て跡形も無い。

何故、異界獣は人々を襲うのか。

何故、異界獣は空の裂け目から表れるのか。

何故、何故、何故……！

わかる事は一つ、連中の侵入を許したが最期。

国は、滅ぶ。

「こちら、不落壁監視隊のギャラク！　ダメだ、突破される、うっ、く、来るな、来るなああああ！」

白地の身体、紺色の左腕という監視隊の正式カラーリングの魔機。民衆の安全と平和の象徴が、異界獣の触手と爪にズタズタにされて崩れ落ちる。

戦線は広く、そして濃密だ。しかし、ここに一瞬出来たほんの一つの小さな穴。

異界獣の最大の特徴は、自身の一瞬の変形である。

先程まで二足の獣を象っていたそれらは、一瞬で翼の生えた四足獣となり、小さな隙間に突撃をかける。

もちろん、残存した監視隊と駆け付けた防衛隊の戦力で懸命に止めにかかるが、カバー仕切れなくなった隙を突き崩すように三体の異界獣が風を切って高く飛び上がり、不落壁を越えてしまった。

「まずい、抜けられた！」

「気を散らすな！ 後続が来るぞ！」

「今はこれ以上の侵入を、阻む！」

不落壁と城下街の間には、日の出から歩いてお昼時になる距離の隙間があり、農地や放牧地はここにある。

しかし、そこには、普段は存在し得ない者があつた。

純白に輝く剣を握った、白銀の魔機である。

魔機は異界獣との、つまり地表から不落壁までの距離を一瞬で詰め、一番近くにいた一体を反撃の隙も与えず切り刻む。

「隊長、増援だ！ あ、あれは…… 銀色！」

「なにっ本当か、ロツツ！ 本当に 銀色 だと!？」

「国王親衛隊！ それほどの敵、か……」

基本的に装飾や彩色は騎士の自由とされる魔機だが、絶対に使ってはならない 忌み色 というものがある。

その内、漆黒は異界獣の色であり、誤射を防ぐ為につき最近決められた色だが、金と銀は遥か昔からとある一つの集団を除いて、使用、即死刑という重大な罰則が設けられている。

国王親衛隊……その忌み色を使う事を許された、トップエリート

である。

鋭角的な頭部の頂点に煌めく、鷹を模した金の装飾……この装飾は一人一人違い、どれも国王直々に認められた証拠である。

銀色の魔機は全速力で市街地へ飛ぶ異界獣を追おうと空を翔ける。

「頑張れよお、銀色！」

「娘を頼む！」

不落壁周囲の防衛隊に発破をかけられ、異界獣を追って市街地へ突入する。

「さて、助けに出たのに励まされるとは、初陣がばれたかな？」

シルヴァリス」

シルヴァリスと呼ばれた魔機は何も反応せず、操者の動かし方通りにただ愚直に異界獣を追い詰めつつ、市民の避難路から徐々に遠ざける。

しびれを切らしたのか、異界獣の一体が体の一部を銃に変形させた。

「さっきの剣が恐くつての銃撃戦のつもりなら、この距離で負けはしない！」

操者の叫びに同調して赤い目を光らせるシルヴァリス。

「光れよ、剣！」

異界獣が無数の弾丸を放つと同時にシルヴァリスが剣を一振りした刹那、それら全ては虚空に掻き消え、異界獣が剣の軌跡を描いて真つ二つになり、ドロドロと溶けだした。

異界獣が自身を象る為に必要な『核』を焼き切ったのだ。

一体目は核が残っていようが、あれだけ細切れにされた以上生命維持が不可能になって即死したであろう。

逆に言えば、核が有る限り異界獣は死なないし、異界獣毎にコアの位置はまるで違う。

が、操者は己が重大なミスを犯した事に気がついた。

残った一体に距離をとられてしまったのだ。

逃げられたと言ってもいい。

「もう一体……シルヴァリス、よく見る！」

操者は魔力を赤い目に注ぎ、落日の方向に黒い影を見出だした。

「よくもまあ……奴は逃げを決め込んだ、翔けるっシルヴァリス！」
異界獣は体を可能な限り偏平にして、速く、そして見つかりにくく飛んでいた。

シルヴァリスは更に速かった。

距離を詰めて下に回り込み、切り刻まんと剣を構える。

しかし、異界獣はまるで読んでいたと言わんばかりに下部に銃口を密集させていた。

「いや、違う。奴の狙いは市街地！」

剣と利き腕に集めた魔力全てを全身に、その外に流し込む。

「フウウウウウツ！」

銃口からばらまかれた弾丸をシルヴァリスから展開した力場で防ごうとするが、力場が明らかに薄い。

「魔力を使いすぎた？　そ、そんな馬鹿な……」

訓練とは違う連戦というものに操者は恐怖を覚えた。

「いや、まだ、まだまだっ！」

気合いを入れるも、敵の銃撃は止まず操者の魔力は減る一方。

外は未だ激戦故に増援の見込みは無く、頭部の鷹も片羽が欠ける。市民のシルヴァリスを見つめる目も徐々に当初の希望に溢れたものから、不安と絶望の混じったそれになる。

「ドミしさいさま、ケビン、ぎんいろさんがあぶないよ！」

「ドミしさいもケビンもおうえんしようよ！」

子供二人にドミとケビンと呼ばれた眼鏡をかけた禿頭の老人と金髪の青年は、それぞれを礼拝堂の地下に引きずり込む。

「わかったから、マリーもバルザックもとっと地下に入れ！　あと、ケビン司祭見習いだ、呼び捨てるな！」

「こらこら、子供相手にムキになるな。地下で点呼をとってきてくれ、万が一がある」

「わかりました、司祭様！」

ここの礼拝堂の地下は普段は身寄りの無い子供達の仮のねぐらであり、ケビンもそうだった浮浪児の出である。

しかし今は逃げ込んだ市民でいっぱいであり、もし子供が一人二人いなくても気づかない場合もありえる。

数分後、息を切らせたケビンが顔を青ざめさせて絶望的な一言を發した。

「ハア、ハア、ハア……し、司祭様！ カーチスが、どこにも、いません！」

子供の一人がいない……避難の際に逃げ遅れたのだ！

「ハア、ハア……司祭、様！ 俺が、行きます！」

「ダメだ！ ウチの礼拝堂は無駄に階段があるからな、疲れたろう。私が行く！」

「あつ、司祭様！」

司祭はケビンが止める前に駆け出して、あつという間に市街を縫って見えなくなってしまった。

「司祭様……」

一方、市街上空でも決着がつこうとしていた。

シルヴァリスに埋められた魔石の魔力と操者の魔力、両方が尽きようとしていたのだ。

「どうすればいい……どうすれば……くそおつ、シルヴァリス！」
そして市街。

「しさいさまああああ……」

「よしよし、足をくじいたのか。任せなさい」

ドミ司祭はガレキの中からカーチスを引きずり出し、脇に抱えて走り出した。

（あの銀色は攻めあぐねている。……いや、勝てるぞ！）

「おーいつ聞けええええ！」

「何だ……？ 老人と子供、逃げ遅れたか！？」

シルヴァリスの操者が半ば諦めて意識を散らしていたのが幸いした。

「聞けっ！ 市民はあらかた避難した。力場を解いて左手と右手の剣に魔力をありったけ注ぎ込め！」

「力場を解けたと！？ 死ねと言うか、ご老体！」

それを聞いて司祭は操者が非常に焦っているのを感じ取った。

（市民を『護る』力場を自分を『守る』ために転嫁してしまったか！）

「いいから、さっさと！ 遅かれ早かれ死ぬなら……敵の首でも、討ち取って見せろ！」

「……！ おっしゃる通りだ、左手と剣だな！ それで次は！？」

決意がついたか、先程よりは焦りが抜けた声で操者が次の指示を求める。

「左手で相手を思いつきり、ぶん殴れ！」

「なっ！？ いや、承知した！」

シルヴァリスを覆っていた力場が解けた次の瞬間、異界獣の肉体で形成された弾丸の豪雨に晒され、装甲がちぎれ飛ぶ。

「ぐうつ、こいつ、沈め、よおおおつ！」

シルヴァリスが、魔力を溜めた拳を叩き込む！

しかし、異界獣は銃口になっていた部分の大半を移動させて何ともないように防いでみせた。

「だ、だめだ……」

「諦めるな、むしろ好機だ！ 対角線上に剣を！」

「！」

司祭の言葉の意味を悟った操者はシルヴァリスの右手に握った剣を、左手に気をとられて守りも攻めも手薄になった異界獣に突き込み、そのまま左へ左へと……

「切り刻む！」

異界獣も残った銃口で反撃を試みる、が……

「遅おいつ！」

射出するより先に自身を真つ二つにされ、沈黙した。

「や、やった。やりました、ご老体！」

操者が勝鬨の声を上げるが、そこには既にドミ司祭もカーチスもいなかった。

「ハハッ、挨拶ぐらいさせてくれてもいいだろうに……」

「司祭、それにカーチスも！ ご無事で！？」

「ああ、ケビン。おかげさまでね」

「ケビン、こわかったよおおお！」

「呼び捨てすんな！」

「ハハハ……」

全ての脅威が去った。

人々は礼拝堂の地下からおっかなびつくり出てきてその事実を再確認すると、シルヴァリスに向けて歓声を送った。

「よくやった！」

「さすが親衛隊！」

「国王バンザイ！」

異界獣は地に倒れ伏し、白銀の魔機、シルヴァリスはボロボロながらもそこに立っていた。

誰がこれを敗北と言おうか。

そう、異界獣は、『倒れ伏していた』。

異界獣の周りでナメクジか何かがはいずる様な音がしたのを、司祭は聞き逃さなかった。

「跳べ、銀色！」

「な、なにっ！？」

異界獣の触手がシルヴァリスの少し下を掠める。

司祭が気づくのがあと一瞬遅かったらシルヴァリスは粉々だっただろう。

「怪物が、生きてる？」

「に、逃げる」

「逃げろおおおおおー！」

市民が、地下になだれ込む。

その軌道には、まだカーチスを抱えたままのドミ司祭がいたが、彼らは完全に理性を失っていた。

「どけっ、ジジイ！」

命の為なら今は走りを止めるどころではないのだ。

例え、自らに安全な場所を提供してくれた恩人が目の前にいようが。

「くっ。ケビン、カーチスを受け取れ！ 後は頼……」

「うっ！ し、司祭様！」

カーチスを受け取ったケビンは、自分を赤子の頃から十九年間育てて下さったドミ司祭が人々の波に薙ぎ倒されてボロ雑巾のような姿になる様を見届けた。

「ケビン、しさいさまはなんでうごかないの？」

見届けてしまった。

「このっ、このおおおっ！ 光れ……剣！」

白銀の魔機が残った全てを振り絞り異界獣をバラバラにする。

しかし、全ては手遅れだ。

「ご老体、そんな、嘘だ……」

操者もまた、司祭の壮絶な最期、関わった時間が少なくとも傑物だとわかる偉人の余りにも不条理な最期を見届けてしまった。

そして、その死に様の原因は、間違いなく自身の油断だ。

「金の、鷹……」

「えっ？」

操者は音声を拾い、またそれが司祭の死の寸前に一、二言会話をしていた青年であることに気づいた。

「仮面と変声機でお前がわからなくとも……」

操者は内心祈った。

やめてくれ、それ以上何も言わないでくれ……と。

「覚えたぞ、その鷹の飾り！ 覚えたぞおおっ！ 絶対に、絶対に殺してやるっ、殺してやるからなあああ！」

現実にはケビンにとっても操者にとっても残酷だった。

極めて、残酷だった。

復讐の始まり（１）

月日が経つのは早いもので、不落壁を巡る攻防、シルヴァリスとその操者の初陣、そしてドミ司祭の死から四年が過ぎた。大陸中を震撼させ、大陸全ての国家が同盟を結ぶきっかけになった異界獣達もいつの間にかいなくなり、あの頃孤児だった連中は無事に働き口を見つけて独り立ちした。

「では、皆さん。世界と我らを創り今日も我らを見守る六神に祈りましょう……」

二十三歳になったケ빈は、ドミの後釜として司祭に任命された。

「じゃあな、ケ빈！」

「こんのクソガキ！ ケ빈『司祭』だ！」

「さようなら、司祭様」

「さよなら奥さん、旦那さんによろしく！ 脚を治したら、一緒に飲みに行きましょうって！」

根っこのところは相変わらずだが。

「ケ빈さん、ご飯でゴザルよー」

「お、ちようどそんな時間だな！ ありがとよ、ムラマサ」

焼いたパンとシチューを両手に礼拝堂のドアを蹴破ってケ빈を呼んだ、出る場所は出て締まるところは締まった、エプロン姿の女の子。

ムラマサ、本名不明の元浮浪者で、現在唯一の礼拝堂地下の住人である。

本人曰く、海の方こうからさすらいにさすらってバルグ国に流れ着いたとか。

二人は表から礼拝堂に続く階段に腰掛け、食事に手をつけた。

「いやー、拙者がここにかくまわれてから一年。時間は凄まじいでゴザルなあ」

「あの時は髪の毛ボサボサでめちやくちやでゴチャゴチャ着込んで風呂に入れるまで女の子ともわからなかったなあ」

ケ빈は、死人同然の彼女の首根っこを掴んで風呂場まで引きずり込んで服とフードのついたマントを脱がした時の、わりと大きい胸と、羞恥で赤く染まった可愛らしい顔つきをしみじみと思い出した。

「お風呂は、偉大でゴザル……。見て下さい、この艶！」

ムラマサはそういつて自分の黒い長髪を自慢げに見せつけた。

「髪にシチューについても知らんぞ。あと、そのわざとらしいゴザル口調も、だいぶ板についてきたな」

「そうそう、当事はちよくちよく地が出て……って、違うでゴザルよ！？ これは元から、元からでゴジャル！」

「噛んだぞ、思いつきり。まあ、別にいいよ。ムラマサにはムラマサなりの事情があるんだろ？ 追求する気もないさ」

「ケ빈さんにはいつも世話になっていて申し訳なく思っばかりで、うっ、うっ……ケホケホ！」

「だあっ、飯食いながら感極まるな！ 案の定咳込むし、汚いし！」顔を拭いながらケ빈はムラマサの言葉を反芻した。

「……あれから、四年経ったか」

「一年でゴザル」

「お前じゃないよ！ ドミ司祭は今の俺をどう評価なさって下さるだろうか……」

空をぼおつと見上げるケ빈を見て、ムラマサは自分の考えを口にした。

「自分より五つ年下の女の子と一つ屋根の下で爛れた生活を送っているでゴザル」

「八割以上はお前のせいだよ！ ここ以外の働き口を見つけてよ！ 間髪入れずにツツコミを入れるケ빈。」

付き合い長いだけあり阿吽の呼吸である。

「だが、確かにこんな姿は見せられないなあ。アイツも見つからな

いし」

「アイツ……ケビンさんが言っていた、仮面ヤローでゴザルね？」

「その通り。聞けばあの日の後に親衛隊を辞めちまったらしいじゃあないか」

「確か、不落壁のどこかに就いたらしいでゴザル」

「会いに行つてぶん殴りたいのは山々だが、ここからじゃあ一日半はかかるし、あまりここを離れるわけにもいかないからなあ……」

「仕事なら、拙者も手伝えるでゴザルよ？」

「人見知り万々歳、だな。けっ」

「いやあ、照れるでゴザル……」

「褒めとらん！」

意外なことにムラマサは極度の人見知りで、ケビンに拾われた後も礼拝堂地下からろくに出たがらなかった。

その分ケビンの仕事ぶりはよく見ており、持ち前の飲み込みの速さも手伝つて今では四年前のケビン以上には働くことができる。

「気持ちはいがたいけれど違うんだよ。ほら、お前が来た頃から何やら変な連中が 天へと続く道 とか言う宗教を追っ立てたじゃあないか」

「順序が逆でゴザル。拙者が来た頃には既に連中は追っ立てていたでゴザル」

「あれっ、そうだっけ。まあ、いろいろ過激な連中だし礼拝堂やムラマサを置いてきぼりには出来ないよ」

天へと続く道。

異界獣がいなくなった近年に広まりだしたそれは、教祖にして唯一神のジンという男が人の心に安らぎをもたらしてみせるという物で、教祖に手をかざされた男の動かなくなった半身が治った、だの逸話には事欠かない。

「まあ、祈願祭みたいな行事はまだ先だし。暇を見て見張りでも雇つてみるかね」

「そうと決まればお仕事でゴザル。頑張らしましょう、ケビンさん」

「頼りにしてるぜ」

彼らはお互いに食事をすませ、傍からみたら非常に仲睦まじそうに礼拝堂に入っていた。

不落壁。

かつて異界獣を幾度と無く食い止めてきた壁は、今も国防の要所として機能している。

その屋上で、三機の魔機　ブロン・ブロン　が遙か遠方に目を見張らせていた。

その中から人影が一つ、腰部ハッチをあけて屋上に飛び出した。

「十二時、不審な物は見受けられず。見張りを交代し待機に入る、と」

壁に掛けられた紙に勤務の報告を書き綴った人影、魔機の操者は居るはずの交代を待った。

「すまない、ウェイン。交代か？」

少しした後、若い騎士に声をかけられ、ウェインと呼ばれた操者は返事をする。

「ええ、コバックス。ちょうど貴方に用があつたの」

ウェインは空色の瞳を不満げに細めた。

「わかつた、すぐに行くよ」

「お願いね」

ウェインは会話を済ませて踵を返したが、突然彼女から『クウーッ』と可愛らしい音が響いた。

いきなりなつた音にウェインはハツとし、それが自らの腹から出ていた事に気づくと、顔を真っ赤にする。

「ハハハ、尚更急がなきゃ。レディのお腹まで文句を言ってきたとは、よっぽどだ」

「もうっ、茶化さないでよ！」

恥ずかしそうに階段を駆け降りたウェインを見送ったあと、コバックスも魔機に乗り込み、機体のコンディションを示すパネルに目

を通す。

「魔力炉に異常無し、推進部、オートバランサ、装甲強度、排熱孔、視覚センサ、いずれも異常無し。……おや？」

彼は視覚の角にあった異物に気づき、そしてそれが何かも理解した。

「ウェインがこれを忘れるなんて珍しい。後で渡してやるか」

「休暇……ですか？」

「ああ、休暇だ」

当のウェインは食事を済ませた後、不落壁の西部ブロック隊長マクギニスに呼出しを受け、そして今に至る。

「私は特に問題ありませんが」

「いいや、あるね。一年中働き詰めでは肩に力が入り過ぎて下らないミスをするものさ。」

「はあ……」

「それに、部下に休暇を与えていないと風当たりが厳しくてね。私の頭もこれ以上寂しくしたくない」

マクギニスは自分の禿頭をさすって、苦笑いをした。

「……ではいくら程が良いでしょうか」

「そうだね、市街まで片道一日少し。なら一週間でどうだろうか？」

「わかりました」

「ブロン・ブロンを使うかい？ 片道十分少しまで縮むが」

「ご冗談を！……では、準備してまいります。」

隊長室の出口に向かったウェインは扉を開けると、はにかみながら振り返った。

「隊長！……私の居ない間に西ブロックを陥落させないで下さいよ？」

「ハハハハハ……ぬかしたな！」

「ええ。ふふふ……」

隊長室に笑いが響く。

「それでは、失礼します！」

「ああ、いつてらっしゃい」

扉が閉まる。

マクギニスはウェインの足音が遠ざかるのを聞き届けると、視点を机に向けて、深くため息をついた。

「オズワルド、リンは冗談を言えるまで立ち直ったぜ。お前は何をしているんだ……」

マクギニスが見つめる先には写真があった。

まだ生え際がすっかりしているマクギニスと、どこか幼いウェイン、そしてもう一人、長髪と髭が目を引き男性。

表情こそ硬いものの、三人ともそれぞれを信頼している事が感じ取れる写真であった。

礼拝堂。

すっかり疲れきった表情のケ빈は、部屋に入ってベッドを見るなり目の色を変えて飛び込んで、身体を大きく伸ばした。

「くはーっ、疲れた……」

『むにっ』

「キャッ！」

手の平に感じた柔らかな異物感と間の抜けた声に気がついたケ빈は、ベッドから異物感の正体……ムラマサを引きずり、部屋からほうり出した。

「あっ、どうしてそんな酷い仕打ちをするでゴザルか!？」

「いいからとっとと出てけ！ お前には地下があるだろ！」

「嫌でゴザル！ 二階の方が陽射しが暖かいのでゴザル！」

極めて真剣な面持ちで言い切るムラマサに、ケ빈は馬鹿馬鹿しくなった。

「わかったわかった。そんな代わり、二人だから狭いぞ？」

「構わないのでゴザル。それに、二人の方がもつとあったかくて素

敵でゴザル。……ケビンさん、顔が赤いでゴザルよ?」

ケビンは指摘の通り、顔を真っ赤にしながらムラマサの首根っこを掴んでベッドに引きずり込む。

「なあんでお前は、そんな恥ずかしいこと平気で言えるかな!」

「人前では無理でゴザル、ケビンさんの前だからこそ言つのでゴザル」

「なお悪いわ!」

こんな感じでしばらくギャーギャーと問答していた二人だが陽射しの魔力には勝てず、結局二人仲良くすやすやと眠りについた。

夕方。

「では、行ってまいります。」

ひとしきり準備を済ませ、操者用のピッチリとしたスーツから簡素な服に着替えたウェインが不落壁の門に一礼する。

門の上には、同僚達が男女問わず大挙して見送りに来ていた。

「元気だな!」

「貴重な女の子成分があ……」

「なんか土産頼むぜ!」

「俺はエロいの!」

「俺もエロいの!」

「僕も!」

「わちきも!」

「磨も!」

「おいどんも!」

「バカヤロー! 女の子だぞ! ウェインさん、いつてらっしゃい!」

「空気読め!」

「何だとお!?」

ウェインは、苦笑しながらも自分を見送ってくれる仲間の多さに、ただただ感激した。

「ウェイーンッ！」

集団の奥から、聞き慣れた声が響く。

「コバックス!？」

勤務終了から間もないコバックスが、息を切らせながら集団を掻き分ける。

「忘れ物だ、ウェイーン！」

ウェイーンは遥か高くから放り投げられた物を、慌てて受け止めた。

「これは……」

「ブロン・ブロンの中に落ちてたぜ！ 大事な物だろ！」

「……ありがとう、本当にありがとう！」

「いつてらっしゃい、ウェイーン！」

「いつてきます！」

ウェイーンが嬉しそうに手にしたそれは、白と黒のツートンカラーの仮面。

四年前、シルヴァリスの操者が付けていた仮面と全く同じ物だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7094z/>

リベンジ！

2011年12月25日21時47分発行